Osaka University Knowledge Archive

Title	伝北村季吟筆『源語秘訣』と箕形如庵宗乾
Author(s)	宮川, 真弥
Citation	語文. 2015, 104, p. 31-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70954
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

伝北村季吟筆『源語秘訣』と箕形如庵宗乾

宮川　真弥

一　はじめに

本稿では北村季吟筆と伝える二本の『源語秘訣』および周辺資料についての書誌調査を報告する。また、『源語秘訣』の季吟奥書に見える「如庵宗乾」の記述から、従来未詳とされてきた季吟の源氏学の師・箕形如庵が、『徒然草寿命院抄』などの開版者である「如庵宗乾」と同一人物であることを指摘する。

二　季吟関連『源語秘訣』について

二・一　季吟と『源語秘訣』との関わり

季吟と『源語秘訣』の関わりについては、以下のごとく、各資料に散見される。

一　予先年箕形如庵（ミカタジョアン）〈八条宮に奉仕〉に此物語の講談を聞、十五ヶの秘訣、三ヶの口伝等を請得たり。

（季吟『湖月抄』[1]「凡例」）

（稿者注：寛文元年〔一六六一〕九月）廿七日　芸州広嶋満田長右衛門〈高明／大声〉もとにいく。自作之文章あまたみる。源氏抄つくりてみせきこゆ。〔中略〕満田氏いまだ三ケの大事伝授せぬよし愁えてゆるしきこゆべき旨、懇望なりし。夜に入て帰ル。

廿八日　満田氏に源語秘訣をつかはしつ。昼、内田兵三郎もとにてあそびくらしつ。夜は方々の返事書ぬ。〔中略〕

（稿者注：同年十月）十一日　よる由敬、慈仙来て閑話、夜更ぬ。由敬云、此比於江戸卜祐土佐日記の抄作りて春斎に序かか（ママ）ゝせたりし。板行せんとて見せたりしに、所々もれたる事おほし。就中山崎の相応寺の事不知よしなりければ、さいつころ予がうみまつをみせたりしに、其なかにありし事をおぼえていひやりつ。其外あまた所其うみまつの中よりいひやりにけりと。云々。卜祐は儒なり。いかでか歌書をしらん。道春が博学なりしも野槌に歌書の事はおほくあやまりにけり。

まして其以下をや。海松の中より書出て、したりがほに板行しつらん所々をみるたびにこそかたはらいたからめといとおかしかりき。子孫につたへて悪(ママ)く秘すべき事を心得ぬ人にみすべからず。由敬は野子休太郎（稿者注：湖春）物よみの師也。何のかくすべき事かはとおもへば、うみまつにかぎらず。

（季吟『寛文元年日記』[2]）

源語秘訣をも見せにけり。

揚名ハ名バカリヲアゲヲク心也。タトヘバ伊予ノ介ニ任ジテハ伊予ノ国ヲ治ル也。是ヲ職掌（シキシヤウ）（左傍：ツカサトル）ト云也。徳分トハ伊予介ニ任ジテ其知行ヲトルヲ徳分ト云也。シカルニ揚名介ト云ハ伊予介トハ云テ伊予ノ国ヲ治ルツカサドリモナク、知行モトラヌ故ニ、只名バカリト云義也ト〈云／々〉。今ノ世ニ受領シテモ職掌モナク徳分モナク有名無実ニテアル官人皆揚名也。其故ニ関白ニテ其職掌ナキ心ニテ揚名関白ト清慎公ノ玉ヘルコト源語秘訣ニモアリ。

三ケ一　是中古延喜ノ比マデ四ノ字ヲイムコトナキユヘニ吏（式部卿重明親王ノ記録也）部王記ニモ徴(ママ)子女王ノ入内ノ記ニ、三日ノ夜ノ餅ヲ銀器四杯ニモルコトアリ。後代ニハ四杯ヲ忌テ待賢門院入内ノ記ニ、三日ノ夜ノモチヲ三杯ニセシコトヲ河海抄ニ引テ三杯一（サンハイイチ）具（グ）ニセシ心ニテ三か(ママ)一(ママ)の義註セリ。花鳥余情ニ其義ヲウチテ不用シテ、吏部王記ノ銀器四杯ノコトヲ引テ、源氏君四杯ト云コトヲ三が(ママ)一ツトノ玉ヘリト註シ玉ヘリ。尤其義正シキ故、宗祇、逍遥院ヲ始、称名院、三光院も(ママ)是ハ花鳥ノ義ニシタガヒテ、切紙ニモ如此シ玉ヘリ。吏部王記ハ源語秘訣ニ引用テアリ。但此三カ一ツト云詞ニ付テ、源語秘訣ニハ左伝ヲ引玉フ。家伝ニハ左伝ノ義ヲ用ヒズ。只三カ一ツハ四ツト云義バカリヲ用ル也。其ユヘニ切紙ニモ左伝ノ沙汰ナキ也。是家伝ノ秘密也。左伝ノ義此所ニ用ニタヽズ、入ホカナリト師説也。奥書ニ禅定殿下トハ東光院殿〈玖山公九条ノ植(ママ)道公〉貞徳ニ源氏物語ヲ御伝受(ママ)アリシ御方也。権大納言実澄(サネズミ)トハ三光院殿也。天正ハ人王百七代正親町院ノ年号也。

（「一二、源氏物語三箇之大事[3]」（柳沢文庫蔵）裏書）

また、「北村家現存遺物目録[4]」にも「一、源語秘訣　一冊　同（稿者注：季吟自筆）」とあり、昭和三十年頃には季吟自筆『源語秘訣』が北村家に伝存していたようである[5]。以上のことにより、季吟が『源語秘訣』を所持していたことは確実視される。なお、『湖月抄』の記述については後述する。

従来、季吟に関係する『源語秘訣』については、『源氏物語事典』「注釈書解題」に、

桃園文庫蔵の一本の奥に「右一冊者以二如庵宗乾伝受之本一令二書写一畢。寛永十九年十月中旬、拾穂」とあるから、如庵や季吟も伝えたと見える。〔中略〕桃園文庫蔵の北村湖春自筆本[6]と其日庵自筆本[7]とは、いずれも季吟所伝の本で、みな前槐本の系統である[8]。

とあるなど、季吟の息・湖春筆の『源語秘訣』は知られてきたが、季吟筆本については言及されなかった[9]。まずは、季吟筆と伝える二本の『源語秘訣』についての調査報告を行う。

二・二　伝季吟筆『源語秘訣』

伝季吟筆『源語秘訣』の一本は無窮会に、もう一本は九州大学附属図書館に蔵されている。以下に書誌を示す。

無窮会平沼文庫蔵。整理番号：二一二六四。写本。楮紙列帖装。1冊。縦二十五・八糎×横十八・四糎。青鈍色無地表紙。墨付丁数23丁、遊紙前1丁。一面10行書、一行20字程度。本文は一筆。文字の修正跡が散見される。本文と同筆の頭注を有する。朱で濁点や句読点、庵点、朱引などを付す。遊紙に「北村季吟／自筆写本」と朱書きした付箋が貼付される。印記、「無窮会／神習文庫」（陽文長方印）、「刀水／漁史／珍蔵」（陽文方印・渡辺金造、以上1丁表）。

九州大学附属図書館蔵。請求記号：五四五／ケ／三一。写本。楮紙袋綴。1冊。縦二十七・五糎×横十九・七糎。金茶色無地表紙（改装）、打付書「季吟翁著／源語秘決」（左肩）、打付書「江左／朝日乃屋」（右下）。元表紙は本文共紙、打付書「北村拾穂軒筆／源語秘決」（右肩）、現在は表紙見返しとなっている。墨付丁数22丁、遊紙後1丁。一面10行書、一行20字程度。本文は一筆。本文と同筆の頭注を有する。朱で濁点や句読点、庵点、朱引などを付す。季吟奥書の後に花押が捺される。印記、「岩尾／寿／所蔵」（陽文方印）、「南部氏／蔵書印」（陽文長方印）、「南部晋」（陽文丸印）、「音無文庫」（陽文長方印）、「九州帝／国大学／図書印」（陽文方印）、「九州帝国大学図書館／71168／昭和5.3.15」（陽文丸印・黒色）（以上、1丁表）、「九州帝国大学／図書」（陽文丸印）（18丁表）。

両書は字詰・行詰から、仮名の字母、頭注傍注、朱による濁点などに至るまで、極めて近似している。ともに奥書は以下の通りである。

後成恩寺殿奥書也
唯伝一子之秘説也堅可禁外見者／判」（20丁表）
（桂の院の注、中略）
此桂宮之註一条殿〈冬良〉御自筆花鳥余情之／別註此外無之
十五ヶ条〈二〉加此一ヶ条者十六ヶ条候
唯伝一子之書也不可出閫外者也」（21丁裏）
此一巻左大将冬良家本〈後成恩寺／自筆〉書写綴（ママ）雖為／親昵之人
曽以不可免披見之由懸／春日大明神　住吉　玉津嶋等明神所
／相誓永可存此旨者也」（22丁表）
右一冊者以如庵宗乾伝受之本令書写／畢
寛永十九年十月中旬　　拾穂
」（無窮会本：23丁表、九大本：22丁裏）

奥書に関する両書の差異は、九大本が季吟奥書を前に続けて記すのに対して、無窮会本が22丁裏の半丁を空けている点である。

本文について、両書に共通する他本との顕著な異同は、薄雲巻「我が君のたすきゆひ給へる」の注記の末尾、「治承四年東宮〈安／徳〉御着袴之時着御之様存知の人なきによりて沙汰有て用意せ

られたれとも着御はなかりし也」[10]を欠く点である。これは先述の湖春筆本とも共通しており、[11]季吟所持本の特徴として指摘しうる。

さて、両書が書体も含めて極めて近似する要因としては、

①無窮会本が九大本の臨模本である。

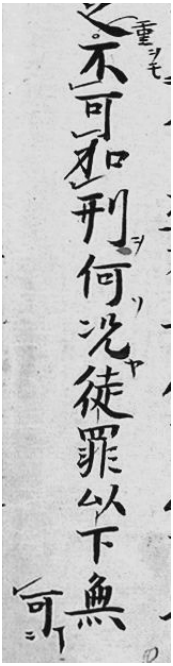
②九大本が無窮会本の臨模本である。

③ともに共通祖本の臨模本である。

の三例を想定しうる。以下、本文比較を行い、検討する。

無窮会本は桐壺巻「みこはかくても」の注記、1丁裏の最終行から2丁表にかけての「由是案之死罪之重不可加刑何況徒罪以下無可更論」において、図一のごとく、傍線部「重」を落としたため補入し、波線部「可」を「無」の横に記している。九大本はこの箇所において「重」を本文に組み入れ、「徒罪以下」で丁を改め、「無可更論」と2丁表を始めている。そのため、以下三行は二字ずつ改行位置がずれている。両書で改行位置が異なるのはこの箇所のみである。この例について検討するに、臨模を行うことによって、九大本の形から無窮会本の形に変更されることは考えにくい。なぜなら、仮に傍線部「重」を落として書き続けたとしても、「徒罪以下」に至って「無」が次の丁の冒頭にあることに気づく筈であるからである。波線部「可」が無窮会本の位置に来るためには、波線部「可」の脱落に気づく前に「更論」を記す必要があるが、臨模の場合、それは起こりにくい。むしろ、九大本が補入箇所を本文に組み入れることによって、改行位置のずれを生じさせた蓋然性が高いだろう。なお、無窮会本が本文を脱落させたために補入記号を用いて補入している、10丁裏「置同銀」、16丁裏「冠者の君」の二箇所では、九大本は傍線部の補入された文字をそれぞれ本文に組み入れている。参考として挙げておこう。

【図一】無窮会本　1丁裏最終行



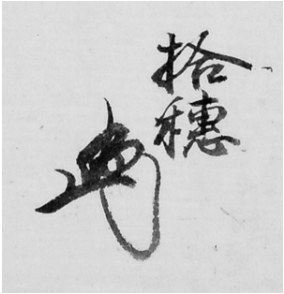
また、「官位昇進等の事を議定せしかば」（5丁裏）において、無窮会本では「昇位」とあり、「位」を見せ消ちにして、「進」と傍記している。対して、九大本では「昇進」とあるものの、擦り消ちした上に「進」を記している。さらに、「勘申七歳以下人遇親喪并件親遇七歳以下人喪之間各行神事以否事」（2丁裏）において、九大本は傍線部を「問」と誤っている。加えて、先述の通り、無窮会本は季吟奥書の前に半丁空けるのに対して、九大本は丁を空けずに続けて記している。この三例はともに無窮会本の形から九大本の形に変わった蓋然性の高い事例である。

以上のことにより、まずは無窮会本が九大本の臨模本である蓋然性の低いことが指摘できる。

では、九大本が無窮会本の臨模本なのだろうか。ここで問題となるのは、九大本には季吟奥書に図二のごとく花押が捺されていることである。奥書の通り、寛永十九年の書写であれば、季吟十

九歳時の花押ということになる。比較に適当な若年期の花押は見当たらないため、後の花押と比較すると[12]、その形状にかなりの差異が見受けられることがわかる。同時期の花押がないため、判断は慎重であるべきだが、この花押も臨模によるものと推定されよう。

花押が臨模であった場合、親本の『源語秘訣』から写したのか、それともその他の資料から写したのかが次の問題となろう。これについては、現存資料からは判断が困難である。ただ、わずかな例ではあるが、無窮会本には見えず、九大本にのみ見える傍記があることは注意を要しよう。桐壺巻「みこはかくても」の注記において、2丁表の「神祇令云散斉之内」の「散」に付された「致カ」の傍記、2丁裏の「然則於行神事有何妨哉」の「妨」に付された「サマタケ」の傍記である。また、同じ注記において、1丁裏の「称上件両事臨時有疑」の「称」には九大本では右傍に「イフナラク」、左傍に「アハバ」とある。無窮会本では図三のごとく、右傍に「イフナラク」とある。左傍には消し跡が見えるが、判読は困難であり、かろうじて一字目が「ア」のように見えなくもない。なお、字義からは左傍に「イハバ」とあるべきであろう。



【図二】九大本花押

【図三】無窮会本 1丁裏「称」

このわずかな事例から判断を下すことは難しいが、季吟の花押を有する共通祖本が存在し、無窮会本も九大本もともにその臨模本である可能性は十分にある。また、季吟十九歳という非常に早い時期の資料であり、筆跡の比較に適当な同時期の自筆資料に乏しい。「北村家現存遺物目録」に『源語秘訣』の名が見えることもあり、自筆の判定には資料の新出を俟ちたい。

二・三　その他の伝本

本節では、季吟に関する『源語秘訣』のその他の伝本について簡略に触れておきたい。

無窮会本同様の季吟奥書を有する『源語秘訣』としては、先述の桃園文庫湖春筆本の他、鶴舞中央図書館本[13]が挙げられる。

桃園文庫其日庵自筆本[14]や神宮文庫本[15]は、それぞれ『源語秘訣』の各条を省略したものであるが、無窮会本と異なる季吟奥書を有している。また、無窮会本と同様の頭注の一部を、書陵部本[16]と蓬左文庫本[17]が有している。それぞれの伝本については、本稿では詳述せず、紹介にとどめておきたい。

さて、カリフォルニア大学バークレー校三井文庫蔵『源語秘訣[18]』については、若干の問題があるため言及しよう。

バークレー本は以下の奥書を有する。

右一冊者光源氏物語十五箇之／大事而、従二玄旨法印一明心居士／相承之趣也。然処強因二貴／望一而至二頭書一不レ違二一字一書／写而以令レ附二与之一訖。全不レ可／レ有二他見一者乎。

延宝九辛酉歳五月吉辰　長孝／判

衛広英丈

亮友令二書写一之時依レ為二／小本一而本註之後以二細／字一二行〇書之全清書／有レ之者可レ出レ頭者也

玄旨法印は細川幽斎、明心居士は松永貞徳を指す。長孝は望月長孝のことである。長孝は松永貞徳に学び、季吟にとっては兄弟子にあたる。衛広英丈は谷衛広[19]のことである。

奥書傍線部の通り、バークレー本には本文中に「頭書」として割注が挿入される。問題は、この割注が無窮会本などの頭注と一致することである。かつまた、バークレー本も無窮会本同様、薄雲巻「我が君のたすきゆひ給へる」の注記の末尾、「治承四年東宮〈安／徳〉御着袴之時着御之様存知の人なきによりて沙汰有て用意せられたれとも着御はなかりし也」を欠いている。

加えて、延宝九年（一六八一）五月の長孝の奥書が記されるが、長孝は同年三月に没しており、不審である。

さらに、貞徳が『源語秘訣』を伝えられていたという点にも疑問がある。季吟は『湖月抄』「凡例」において、「先師逍遥軒貞徳に桐壺一巻の講尺を聞て、此物語の口伝等再聞し侍し」と述べるのみであり、また日大本『教端抄』の跋文[20]でも貞徳の学問について詳しく述べるものの『源語秘訣』に言及がない。貞徳『戴恩記』などにも『源語秘訣』の記事は見えない。

以上のことを踏まえるに、バークレー本の奥書の信頼性には疑問符がつくと言わざるをえない。季吟所伝の『源語秘訣』を基とした伝本である可能性も十分にあろう。

三　箕形如庵宗乾について

季吟は松永貞徳門下であるものの、源氏学においては箕形如庵（みかたじょあん）をも師としていたことは、以下の『湖月抄』の「凡例」からよく知られている。

一　予先年箕形如庵（ミカタジョアン）〈八条宮に奉仕〉に此物語の講談を聞、十五ヶの秘訣、三ヶの口伝等を請得たり。又先師逍遥軒貞徳に桐壺一巻の講尺を聞て、此物語の口伝等再聞し侍し。此如庵老人はもと称名院殿、三光院殿より相つたへて、八条の宮の御前にても講ぜち申され侍しとかや。其故に此講尺には細流を以てもとゝせられ侍し。

『湖月抄』の「師説」のほとんどが箕形如庵の説であると「凡例」で述べられる人物でありながら、従来、箕形如庵の伝については、この記述が唯一の手がかりであった[21]。ここで注目すべきは、箕形如庵から「十五ヶの秘訣」を得たという記述である。この「十五ヶの秘訣」は、無窮会本や九大本の季吟奥書の存在からも、『源語秘訣』を指すと考えられる。再度、その奥書を示そう。

右一冊者以二如庵宗乾伝授之本一令二書写一畢

寛永十九年（稿者注：一六四二）十月中旬　拾穂

寛永十九年に季吟（拾穂）が「如庵宗乾」から『源語秘訣』を伝えた「如庵宗乾」と、季吟の源氏学の師である「箕形如庵」とは同一人物とみて誤るまい。注目すべきは箕形如庵の名が「宗乾」と示される点である。「如庵宗乾」といえば思い起こされるのは、たとえば秦宗巴『徒然草寿命院抄』の刊記「慶長九暦閼逢執除姑洗良辰／日東　洛陽　如庵〈宗乾〉刊行」[22]である。

慶長九年（一六〇四）三月に刊行された『徒然草寿命院抄』のほか、文禄五年（一五九七）刊『証類本草序例』[23]や慶長四年（一五九九）刊『元亨釈書』[24]などの刊記にも「如庵宗乾」の名が見える。この「如庵宗乾」については、古活字版研究の側から考察が加えられてきた。川瀬一馬氏は「徒然草寿命院抄解説」[25]において、本書は、下巻奥に、

○慶長九暦閼逢執除姑洗良辰　日東　洛陽　如庵〈宗乾〉刊行

と刊記があるが、其の刊行に当つて、慶長四年刊行の元亨釈書の真名活字を襲用してゐる。元亨釈書の刊記は、

○于時慶長四年戊亥月日　日東　洛陽　如庵　宗乾　摸行

とあつて、如庵〈宗／乾〉の伝を詳かにしないのは残念であるが、秦寿命院宗巴と相当交渉のあつた者には相違あるまいと思ふ。

と述べられ、また、『増補古活字版之研究』[26]では、

如庵宗乾は慶長四年に元亨釈書を、同九年に徒然草寿命院抄を刊行してゐる外、五十川了庵の太平記の刊行にその大型活字を貸与してゐたりして、医師であらうと推定してゐたが、本書（稿者注：『証類本草序例』）を先づ活字印行してゐる事実に拠つて、その推定は裏書されると言つてよい。

と述べられたが、その伝についてはなお未詳[27]である。

従来、季吟の師「箕形如庵」と『徒然草寿命院抄』等の古活字版開版者「如庵宗乾」とが結びつけられることはなかったが、『源語秘訣』の季吟奥書から推すに、この二者は同一人物とみてよいのではないだろうか。最も古い刊記を持つ『証類本草序例』の文禄五年（一五九七）から、季吟に『源語秘訣』を授けた寛永十九年（一六四二）まではおよそ四十五年の懸隔があるが、『湖月抄』の「如庵老人」との呼称を『源語秘訣』相伝時期の寛永十九年頃のものと考えると、年齢の面にも問題は生じない。

また、「如庵宗乾」が秦宗巴『徒然草寿命院抄』を出版していることも示唆的である。季吟の妻については、林述斎『寛政重修諸家譜』[28]に「妻は秦寿命院某が女」とある。秦宗巴（一五五〇～一六〇八）の娘であるとすると年齢がそぐわないため、孫ではないかと推定されるが、それはともかくこの記述によれば、季吟と秦宗巴とは姻戚関係にあったということになる。

さらに、『北村宗与家系』[29]によれば、季吟の祖父、宗龍は曲直

瀬一渓（初代道三、一五〇七～一五九四）に医を学び、寛永二十一年（一六四五）十一月二十五日に九十二歳で没したとされる。[30] また、父、宗円は曲直瀬玄朔（二代道三）に医を学び、慶安五年（一六五二）八月十九日に五十六歳で没したとされる。[31]

秦宗巴も曲直瀬一渓門下であり、宗龍とはほぼ同年代である。ここで北村宗龍と秦宗巴、さらに北村家と秦家との交流圏を想定することは不自然ではあるまい。そして、秦宗巴と「如庵宗乾」との関係性を踏まえると、「如庵宗乾」もその医師たちの交流圏に加わっていたと見られよう。

『源語秘訣』の伝授は寛永十九年であった。季吟の婚姻はそれから遅れること数年の正保元年（一六四五）頃と見られる。ともに宗龍の存命中であり、ともに宗龍たちの交流がその背景にあったのかもしれない。「如庵宗乾」から教えを受け、『源語秘訣』を相伝しえたのはこのような縁があったためではないだろうか。

四　おわりに

本稿では北村季吟筆と伝える九大本『源語秘訣』が臨模本であり、季吟自筆とは認めがたいことを述べた。また、季吟に関する『源語秘訣』諸伝本について報告を行った。

さらに、従来未詳とされてきた季吟の源氏学の師・箕形如庵が、『徒然草寿命院抄』などの開版者である「如庵宗乾」と同一人物であることを指摘した。それに伴い、北村宗龍、箕形如庵宗乾、秦宗巴といった医師らの交流圏を想定し、季吟の婚姻や師弟関係[32]への影響を推定した。これらは、『湖月抄』の「師説」成立の時期や、季吟の出版に対する意識などにも関係してくる。これまで季吟の医師らとの交友は見過ごされがちであったが、今後はより一層の考究を求められよう。

注

（1）『湖月抄』の引用に際しては、『源氏物語湖月抄』（新典社、昭52・7～53・7、北村季吟古註釈集成7～17）を用いた。同書の底本は早印本ではあるが、一部に野村貴次氏の操作が加わるため、他の伝本も適宜参照し、異同のないことを確認している。

（2）北村季吟大人遺著刊行会『北村季吟日記』（昭38・11）。

（3）季吟から柳沢吉保へ伝授した切紙『古今集并歌書品々御伝受御書付』（所蔵番号：〇一一一四）の一部。原本閲覧停止中のため、実物は未見。宮川葉子『柳澤家の古典学（下）―文芸の諸相と環境―』（青簡舎、平24・2）に翻刻・解題が備わる。切紙の呼称は宮川氏に従う。また、国文学研究資料館がマイクロフィルム（マイクロ請求記号：350-1-8-E）を所蔵している。

（4）祇王小学校『北村季吟』（昭30・3）、一三一～一三二頁。

（5）稿者はその所在を確認できていない。

（6）東海大学付属図書館桃園文庫蔵。写本。縦二八・一糎×横二〇・四糎。楮紙袋綴。1冊。19丁。整理番号：桃九―八一。湖春自筆。香色鞠紋型押表紙。打付書「源語秘訣」。表紙に「北村湖春筆」とある極札を貼付。本文・奥書等一筆。頭注（墨書）および振り仮名は本文と別筆。ただし、10丁表頭注「イ本／二人人人」のみ本文と同筆か。印記、「洛住判／事神原／甚持本」（陽文方印・黒色、神原甚造）、「篁園文庫」（陽文長方印、竹内篁園）、

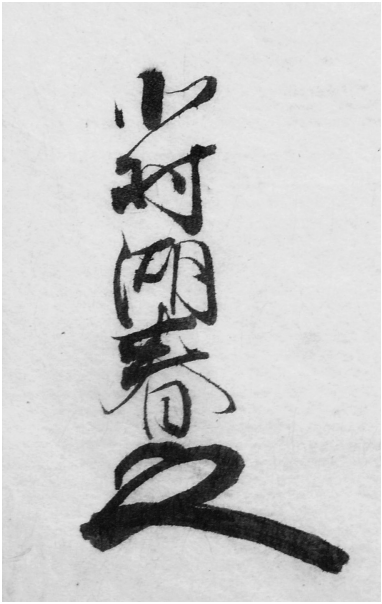
「柳外園／蔵書印」（陽文方印）。

後述する無窮会本と同様の奥書を有し、季吟奥書に続けて以下の奥書が記される。

此源語秘訣者、後成恩寺兼良公、河海抄以往之諸抄未考之事十五ヶ条勘二考之一而、被レ伝二家宝一之書也。仍被レ加下不レ可レ出二閫外一之奥書上矣。先年依二内海直重之懇望一、授二源氏物語三ヶ之口訣一畢。今也重而書二写此一巻一而、応二其需一者也。堅不レ可レ有二他見一矣。

元禄七年七月廿五日　北村湖春（花押）

【影印】湖春署名・花押（桃九―八一）



なお、稿者は該書の他に、湖春の花押の存在を知らない。

（7）東海大学付属図書館桃園文庫蔵。写本。縦七・七糎×横一七・八糎。楮紙袋綴。1冊。30丁、墨付丁数18丁。整理番号：桃九―八七。代赭色無地表紙。打付書「源氏秘説〈不許他見〉」（左肩）。内題「源氏物語三箇之大事」。本文・奥書等一筆。『源語秘訣』の後に「源氏三箇之大事」を載せる。『源語秘訣』の本文・注記を独自に略記している。なお、『花鳥口伝抄』や『口伝抄』とも一致しない。

『源語秘訣』に関する奥書は、十五条の注の後に「奥書曰／唯授一子秘説也堅／可禁外見者也／後成恩寺　御判」、「以或証本写之不／曽外見者也／明応六年三月十六日／前槐判」とあり、桂の院の注を挟んで、「花鳥余情之別注此外／無之十五ケ条加此一ケ条／者十六箇条候十七ケ条／由承候無所見不／審候」、「此一通以後妙華寺／関白自筆写之件／一通従准后借賜之／也」「右十五ケ条之内揚名介／宿直嚢子のこ餅三ケ／一為三ケ大事別有切紙／無的伝者怒々不可／見之者也／玄旨法卯判（ママ）」、「源氏は和文の長也誠に／此物語見さらん哥人は／無念たるへし長頭丸／右十五ケ条者後ノ成／恩寺伝授之秘説なり／其余者〈下官〉湖月抄／に顕然なり／尊父秘伝之一章也／季吟／北村湖春」、「法印主温欽写之」、「右秘書備成先生之／所持スル処乞而写之畢／其日庵／白芹／文化七庚午正月」とある。

（8）大津有一氏執筆箇所、東京堂、昭35・6。なお、この記述の基と思われる藤原作編『日本文学大辞典』（新潮社、昭25・5増補改訂）の「源語秘訣」の項には「筆者蔵の北村湖春自筆本と、其日庵自筆本とは、いづれも季吟所伝の本で、この（稿者注：前槐本）系統のものである」（池田亀鑑氏執筆箇所）とある。

（9）『日本古典文学大辞典』の「源語秘訣」の項には、「その他箕形如菴の本を季吟が写した神宮文庫本などもあり、重んぜられていたことがわかる」（玉上琢弥氏執筆箇所）とある。しかし、現在、神宮文庫には奥書に如庵の名が見える『源語秘訣』は存在しない。これはおそらく、『源氏物語事典』「注釈書解題」に「神宮文庫蔵一本もやはり兼良、実隆、幽斎の奥書を記し、次に「〔中略〕」と

記している。桃園文庫蔵の一本の奥に「右一冊者以二如庵宗乾伝受之本一令二書写一畢。寛永十九年十月中旬、拾穂」とあるから、如庵や季吟も伝えたと見える」とある記述の傍線部を見落としたために生じた誤りであろう。

(10) 中野幸一編『花鳥余情 源氏和秘抄 源氏物語之内不審条々 源語秘訣 口伝抄』(武蔵野書院、昭53・12、源氏物語古註釈叢刊)に拠る。

(11) ただし、本文と別筆で頭注として書き入れられている。

(12) 『北村季吟集』(八木書店、平6・8、天理図書館綿屋文庫俳書集成)、『町制四十周年記念特別展図録 北村季吟―俳諧・和歌・古典の師―』(銅鐸博物館、平7)などを参照。

(13) 鶴舞中央図書館蔵。請求記号:河ケ―三〇。写本。楮紙袋綴。1冊。縦二十七・八糎×横十九・八糎。青鈍色地に代赭色刷毛目表紙。書題簽「源語秘決 全」(左肩・刷の片子持枠)。墨付丁数24丁、遊紙なし。一面10行書、一行20字程度。本文は一筆。朱で頭注や傍注、清濁点、句読点などを付し、朱引を有する。2丁表に朱で「秀根案加朱者異本校合乎」とある。頭注には無窮会本の頭注の一部を含む。河村秀根旧蔵本。印記、「市立/名古屋/図書館/蔵書印」(陽文方印)、「尾張河村復太郎秀根蔵」(文字のみ・黒色)(以上、1丁表)、「市立名古屋図書館/大正11年12月1日/4343」(陽文丸印)(裏表紙見返し)。序文として、1丁表から2丁表にかけて、「光源氏の物語は説〳〵多しといへとも信/用するにたらす当流には多く彼荘子の寓/言のことしあとにもなき事を面しらふ作り/書て紫式部か上東門院へ申いらせたりとはか/りみるなり異説には法蔵を土台として/作れり共いへり又好色をつかいとにして/実は教戒の心ありとも云りそりもさも有/へし紫の君を賢徳おはしける人に(ママ)を/明石の君に貞女の模様を顕し花散里を列/女の風によせ又落葉の宮女三の宮なとの不/貞を作りあけて勧善懲悪のいましめ/ともせしなるへし詩花言葉の妖艶優(ママ)玄は/更にもいふへからす誠希代の筆法なり抑此/物語に三箇之秘訣有之むかしより伝受/来れり外に十二箇条十二箇条の難儀有中比桃華/禅閤の御所博識理会の君にしてよく此物/語のなんき共を弁せさせ給ふ此物語におひて信実の博(稿者注:伝カ)受有かにはあらす有識の品故実の/趣をつゐて難儀ともせし事を此物語の秘/決にはするなり古来より大事とせし事/なれは後なををろそかにする事なか/れ/(以降、朱)右ハ名目(稿者注:後出の秘訣名目)ノ続に是を出せり此序拾穂軒筆せしとなり」とある。奥書は十五条の注の後に、後成恩寺奥書と文明九年兼良奥書があり、ついで「異本」として、文明十八年実隆奥書に続けて「右之恵与通村卿三ヶ〈ノ〉秘事御抜書同之 寛文七三廿四」とあり、さらに「異本」として、天正十八年幽斎奥書と延徳二年前大僧正奥書がある。桂の院の注の後に「此桂宮之注一条殿〈冬良〉御自筆花鳥余情/の別注此外無之十五ヶ条加此十六ヶ条也」、「右一冊者以如庵宗乾伝受本令書写畢/寛永十九年十月中旬拾穂」とある。ついで「次第不同」等を挟み、巻末に「延享元甲子十月廿日写之 河村秀根」(秀根の下に白く修正跡あり)とある。

(14) 注(7)参照。

(15) 神宮文庫蔵。図書番号:和三門五九七五。写本。楮紙袋綴。1冊。縦二十四・二糎×横十七・一糎。香色無地表紙。打付書「源氏物語十五ヶ条秘訣(稿者注:条秘訣はカスレ)」(左肩)。丁数:9丁。本文は一筆。印記、「神宮/文庫」(陽文方印)、「楮/石」(陰文方印)。『源語秘訣』の本文・注記を独自に略記している。なお、『花鳥口伝抄』や『口伝抄』、注(7)の其日庵自筆本とも一致しない。

奥書は「右源氏物語十五ヶ条之秘訣後成恩寺殿〈号一条禅閤〉/花鳥余情之別注也於当流〈三光院殿〉用捨之事雖有/之古来称

秘訣而師伝之印以口実所伝受也然此／中揚名介三ヶ一宿直物袋称之三ヶ大事為深秘者／他流当流無分也必不可漏脱者也」、「後成恩寺殿秘訣之奥書云／唯伝一子之秘説也堅可禁外見者　判」、「又或奥書云／此一巻左大将家本（後成恩寺殿／御自筆）書写之縦雖為親昵之／人曽以不可免披見之由然春日大明神住吉玉津嶋／等明神所相誓永可存此旨者也」、「紫式部は檀那院僧正の許可を得てまさしく天台／の法に入一心三観の血脈にいれり其故に光源氏／物語といふ題号は妙法蓮華経五字の首題になそらへ／六十帖は即天台六十巻に表し巻の数五十四帖／ありといへと桐壺より御法の巻まて并の巻を除て／廿七帖宇治の巻を一帖に比して廿八帖は即法華／経廿八品になそらへ源氏物かたりの紙数多少ありと／いへとも大数三千枚として一念三千の法文にあて／られしゆへに古人此物かたりに三ヶの大事といふ事を／定めてこれを物かたり伝授のしるしとする事は天台の／法文に空仮中の三諦といふ事ありて是を一心三観とて／許印の血脈とするになそらへて此物かたりを見聞習らへる／人々の讃仏乗の因転法輪の縁となさしめんとて也／これを止観の説と名つけて深秘の中の奥義として／心あさき人にはゆるさぬ事にて候也みたりにし給は丶／哥道の冥加おそろしく且は諸仏の照覧もはゝかりある／へき事なるへし／延宝五年閏臘月十五日　季吟」、「此一巻のうちうたかはしき所々も／侍れと季吟の自筆のまゝ写し竟ぬ／秀皓」とある。

(16)　実物未見。宮内庁書陵部蔵。登録書名：源氏物語秘事。函架番号：一五〇・四六六。写本。1冊。横本。墨付丁数：35丁。印記、「宮内省／図書印」（陽文方印）（1丁表）、「図書費購入／大正十年五月／図書寮」（陽文丸印）（35丁裏）。裁断跡があり、頭注も中途で裁断されている。裁断された頭注のうち、一部は無窮会本の頭注と一致する。また、無窮会本と同様の頭注が貼紙で記される。国文学研究資料館のマイクロフィルム（マイクロ請求記号：20-594-3）にて確認した。奥書は十五条の注の後に、後成恩寺奥書と明応六年前槐奥書があり、その奥書の上に貼紙にて「松風山翁本奥書如斯」として、文明九年兼良奥書と文明十八年実隆奥書が記される。桂の院の注の後に、永正十七年左幕下奥書があり、ついで「雲隠巻の事」があり、天正十年幽斎奥書があり、「松風山翁〈朱／印〉」とある。

(17)　蓬左文庫蔵。請求番号：二―二二。写本。楮紙袋綴。1冊。縦十九・八糎×横十四・二糎。香色無地表紙。打付書「源語秘訣」（中央）。墨付丁数46丁、遊紙前1丁、後1丁。一面6行書、一行14字程度。本文は一筆。本文とは別筆にて朱で頭注を付す。頭注は無窮会本の頭注の一部と一致する。尾張神村氏旧蔵本。印記、「尾府／文庫／図書」（陽文方印）、「蓬左／文庫」（陽文方印）、「神村家蔵」（陽文長方印）（以上、1丁表）。奥書は十五条の注の後に、文明九年兼良奥書、文明十八年実隆奥書の後に「一校了右逍遥院也」とあり、続けて慶長十三年中院通勝奥書がある。

(18)　実物未見。カリフォルニア大学バークレー校三井文庫蔵。写本。1冊。横本。整理番号：一六七〇、分類番号：宗一六二。表紙打付書「源語秘決」（左肩）。国文学研究資料館蔵マイクロフィルム、マイクロ請求記号：225-6-2。整理番号・分類番号は、長谷川強他「カリフォルニア大学バークレー校旧三井文庫写本目録稿」（『調査研究報告』五号、昭59・3）による。分類番号の「宗」は三井宗辰の集書であることを示す。なお、同稿は書名を「源語秘笈」と誤る。また、国文学研究資料館のマイクロフィルムでの確認のため、色は不明。かつ、物差し等が写されていないため、寸法等も不明。縦横比はおよそ2：3。

(19)　日下幸男『近世古今伝授史の研究　地下篇』（新典社、平10・10）、二一七三頁参照。

(20)　拙稿「北村季吟の源氏学（一）―附・日本大学総合学術情報セ

ンター蔵『源氏物語微意　上』翻刻―」（『詞林』第57号、平27・4）、注（2）参照。

（21）たとえば、市古貞次監修『国書人名辞典』（岩波書店、平10・11）の「箕形如庵」の項は『湖月抄』「凡例」の記述を引き写しにしている。なお、『国書人名辞典』では、疑問があるとしながら、箕形如庵の著作として書陵部蔵『源氏講釈聞書』（函架番号：五〇三・一三六）を挙げている。該書は内題に「如庵講尺聞書」とあるものの、注記が『湖月抄』の「師説」と一致せず、「如庵」が箕形如庵を指すかはなお不明である。

（22）『徒然草寿命院抄』（昭6・6、松雲堂書店）。

（23）文禄五年（一五九六）刊。刊記は以下の通りである。「扶桑国平安城／如庵宗乾模行／惟時文禄第五龍集柔兆涒灘（稿者注：丙申）日南至」（天理大学附属天理図書館編『善本写真集35（古活字本）』（臨川書店、昭63・5））。

（24）慶長四年（一五九九）刊。刊記は以下の通りである。「于時慶長四年己亥月日／日東　洛陽　如庵　宗乾　摸行」（早稲田大学図書館蔵、請求記号：ハ04 05587）。

（25）『徒然草寿命院抄』（昭6・6、松雲堂書店、三一頁）。

（26）日本古書籍商協会、昭42・12、七四四頁。

（27）森上修氏は「初期古活字版の印行者について―嵯峨の角倉（吉田）素庵をめぐって―」（『ビブリア』100号、平5・10）や、「（勅版）三題」（『混沌』19号、平7・7）で、「如庵宗乾」は吉田宗恂でないかと推測された。しかし、吉田宗恂は慶長十五年（一六一〇）、季吟出生前に没しており、「如庵宗乾」と「箕形如庵」を同一人物と考える立場からは肯えない。

（28）文化九年（一八一二）成立。続群書類従完成会、昭39・2。

（29）実物未見。以下、引用は野村貴次『北村季吟の人と仕事』（新典社、昭52・11）に拠る。同書所収時、木村盛美氏蔵。

（30）『北村宗与家系』（『北村季吟の人と仕事』23頁）には、「宗竜宗三郎、母谷権左衛門女。従二一溪（ママ）（稿者注：渓カ、一渓は初代道三）道三一学一医、初号助庵、従里村紹巴法眼学連歌、近江国永原天神宮連歌宗匠。事于芸州毛利侯元康、禄三百石。寛永廿一甲申十一月廿五日九十二歳卒。葬于近江国了福寺、法名石心宗竜居士」とある。

（31）『北村宗与家系』（『北村季吟の人と仕事』25頁）には、「宗円初正元、三右衛門。従延寿院法印道三学医、従里村祖白学連歌、平安城住。慶安五年八月十九日卒、五十六歳。京鳥羽要法寺葬」とある。

（32）季吟が武田道安信重に師事していたことは、『大和物語抄』の武田杏仙信成の序文で季吟のことを「家父高弟」と述べることにより、よく知られている。また、貞徳に関して触れることが少なかったが、貞徳『慰草』第九十六段の大意には「此草、説々おほくて正真をしる人まれなり。古道三の見たてをかれしは、おなもみは稀簽草、めなもみは蒼耳（に）と云々」（吉澤貞人『徒然草古注釈集成』（勉誠社、平8・2））とあり、貞徳と曲直瀬一渓との交流もあったらしい。このことについては、福田安典「秘伝の公開としての講釈―医師の講釈と『徒然草』注釈―」（『伝承文学研究』第45号、平8・5）に詳しい。なお、箕形如庵との関係は不明ではあるが、貞徳『源氏物語聞書』（尊経閣文庫蔵）には、「諸抄之事〔中略〕／一覧　如庵ノ作」とある。

※引用に際して、割書・小書・肩付は〈　〉で、改行は／で示した。字体は通行のものに改め、濁点や句読点、訓点を適宜付した。

〔附記〕本稿を成すにあたり、貴重資料の閲覧・複写・翻刻・図版掲載等にご高配を賜りました各所蔵機関に深謝申し上げます。

（みやがわ・しんや　本学大学院博士後期課程）

【表】伝季吟筆『源語秘訣』頭注一覧

〔凡例〕

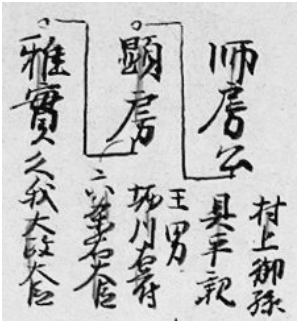
・無窮会本『源語秘訣』を底本とし、頭注を一覧した。

・九大本に異同がある箇所は「九」として九大本の本文を示した。

・「所在」は両書の注記の存在する丁、「項目」は『源語秘訣』の注記項目の巻名、「頭注本文」は頭注の本文をそれぞれ示している。

・「項目」では『源氏物語』の巻名を示した。『源語秘訣』において同一巻で複数の注記項目がある場合は、立項順に「夕顔1」「夕顔2」などのように示した。

・文字で示しにくい項目については無窮会本の影印を掲載した。

所在	項目	頭注本文
3丁裏	桐壺	二等ハ兄弟伯父／叔母ナトノコト也／一等ハ親ノコト也
5丁裏	夕顔1	私註／村上天皇第一広／平親王ハ民部卿の（ママ）／女更衣腹御弟／冷泉院ハ后腹ニ／テマシマスニヨツテ／第一ノ御子ヲ／サシヲキ東宮ニ／立給フ民部卿／是ヲホキナキコト／ニ思テ思死ニ／セシ後冷泉院／物クルヲシクナリ／玉フ也花鳥〈ニ〉アリ
5丁裏	夕顔1	政事要略（クワイキヤク）（九：三〈左傍：見せ消ち〉）百三／十巻アリ／公務交替（クワイタイ）紀弾（キダン）雑事至要臨時雑事等記之
6丁裏	夕顔1	後普光園トハ／二条殿摂政大／政大臣良基也（稿者注：之カ）／コト也
6丁裏	夕顔1	守株待兎／ウサキ木ノクイセ／ニ行アタリテ死／タルヲ或者拾テ／又其クイセヲ／モリテヰテ若又カヤウノ兎ヲ拾事
7丁表	夕顔2	西宮記ハ西宮／左大臣高明公作也／〈イ本〉走（ハシリワラハ）／走孀（クワウハ）〈私云〉孀（クワウハ）
7丁裏	花宴	清慎公ハ実資／公之祖父也実／資公ハ斉敏（ナリ）〈ノ〉／子也
8丁表	花宴	胡飲酒ハエヒス／ノ酒ノム舞也
8丁表	花宴	
9丁表	葵1	随身ノコト職ニヨリテ／随身ヲ玉ハルハ限アリテ／出仕ノ度〈ニ〉尋常〈ニ〉召／ツル、也其外時〈ニ〉随／テ近衛将監将／曹府生一人ツ、仮初／ニ召ワタシテツル、コト／ヲカリノ随身トモ（九：共）一／員トモ云也皆地下ノ／輩也蔵人ノソウト（九：〇）ハ／殿上ノ蔵人将監／ヲ云フソレヲ一／員〈ニ〉具スルコトハ例／ナキ也亦行幸ノ時／ハ左右ノ近衛将監／将曹ハ本陣〈ニ〉供奉スルニヨリテワタクシノ一員ニメシワタスコト叶ハヌコト也
9丁裏	葵1	鹵簿図（ロワノツ）／鹵〈力古切〉／車駕出有／鹵簿　簿ハ／物ヲ書付ル帳也
10丁表	葵2	徽（九：ナシ）

10丁裏	葵2	選子〈イニ〉遵子（ジユン）
11丁表	葵2	河海云待賢門院〈ノ〉／御入内〈ノ〉三日〈ノ〉夜〈ノ〉餅記〈ニ〉／〈徳大寺／左府記〉紫檀〈ノ〉筥／〈文鶴丸／摺〈／レ〉具〉普通〈ノ〉硯／筥〈ヨリ〉高〈サモ〉大〈サモ〉過分〈也〉銀〈ノ〉／小器三〈ツニ〉白色〈ノ〉餅〈ノ〉／丸〈キヲ〉御歯固〈ノ〉物〈ノ、〉具〈ヲ〉／盛様（モタクルヤウニ）三〈ツ〉同様〈ニ〉厳（ウヅシク）／盛（モル）也御箸〈ノ〉台銀〈ニテ〉／作二州浜一（ショ）〈ヲ〉立〈テ、〉レ鶴〈ヲ〉御／箸〈ヲ〉シワヘサセテ／御所アラハシニ／取出ラル、也
11丁裏	葵2	絳（カウ）県〈イ本〉
12丁表	葵2	〈イ本〉／二ヲ首六ヲ身／ニヲ（ママ）ル也
13丁裏	榊	イ本／非三人之可二〈ニ〉開看（イカンス）一／頗〈ル〉渉二〈ル〉苛酷（カコク）一〈左傍：ハナハタシ〳〵〉〈云／々〉
15丁裏	乙女	有司ハ其時ノコトヲ／ツカサトル者也／称唯トハカシコマル／トノ心也
19丁裏	藤裏葉	上ノ弓ハリハ七日／八日迄ナルヘシ／月ヲ四ツニワリ／タル時ハ七日八日／ニアタル也
21丁裏	松風	此段諸本無之